プロローグ

この本の主人公は私の母である。

母は、２０２２年の４月に86歳で急逝した。そのほんの２年半前、母は18年間の別居を経て84歳で離婚を決意し、離婚訴訟をたった一人で戦い抜いて85歳で離婚を勝ち取ったばかりだった。

離婚の理由は言わずと知れた『ＤＶ（ドメスティックバイオレンス）』で、離婚相手の私の父は５歳年上で90歳での離婚となった。かなりギネスに近い熟年離婚年齢なのではないだろうか。

あなたはこの母の決断をどう思われるだろう？

ＤＶの実態を知らない世間一般の女性はこう言うかもしれない。「なんでその歳で？　いまさらわざわざ波風立てなくてもいいのに」「夫に財産があるなら、もうちょっと待てば手に入るかもしれないじゃない」。

男性なら、「夫に対する嫌がらせか？」「男に恥をかかせやがって」「どうせ財産目当てだ

ろ？」そんなふうに思う人もいるだろう。

実際、私の家族は母の離婚決意に対して似たようなリアクションをした。

けれど、ＤＶの実態を知らない人々がそんな言葉をＤＶ被害者に向かって発するのは、ＤＶの二次加害だ。

そしてそれは、ＤＶ被害者の心の傷にさらに深くナイフを突き刺している。

ＤＶ加害者と別れたら、それで解決ではない。ＤＶ被害者やその子どもたちがＤＶ家庭でどのように育ち、その後どんな大人になっていったのかを知らない限り、ＤＶの負の連鎖を熟思することはできないのではないだろうか？

私の母は、私の父と祖母から結婚直後から奴隷のような扱いを受けていた。当時はまだ男尊女卑の思想が残っていた時代だから、母と同じような経験をした女性も多いと思う。だからといって「仕方ない、ここは日本だから」「当時はそれが当たり前」で片づけてしまうと、とんでもないことになる。

結婚直後から、父や祖母が母にしていた行為は今でいうＤＶそのものだ。だが、父にはそ

んな意識はまったくなく、自分がＤＶ加害者であることを否定する。
それどころか、父のＤＶを指摘した私のほうが家族から責められることになった。

ＤＶが常識の家庭で育った子どもは、家庭以外の誰かにその過ちを指摘されない限り、そしてその過ちを認めて自分を変えようとしない限り、なんの疑いもなくそのＤＶを常識として、家族や新しいパートナーにまで強いるようになってしまう。なんとも恐ろしいＤＶの連鎖なのだけれど、これが私の家族に起こったのである。

母が57年間の結婚契約の破棄、離婚をする決断をした背景には、実は『ＤＶの負の連鎖』があった。母はＤＶの連鎖が自分の子どもに起きたことを、身をもって知ることとなった。
見ていた私でさえ、もし同じことが自分の身に起きたとしたら耐えられないほどの悲痛な出来事だった。おそらく、86年の人生の最後の最後に起きた、母の人生でもっとも悲しい事件であっただろうと思う。

「ＤＶ加害者は絶対に変わらない」という人も多い。おそらく多くのＤＶ加害者は自分の非を認めない。だから変わらない。けれど私は、父が88歳という年齢ながら、わずかではある

けれど変わることができた事実も見ている。

けれど、その変化も、関わる人間によってすぐに元に戻ってしまう様子も目の当たりにした。

27歳で結婚した母が、67歳で別居してから18年間結婚契約破棄をしてこなかった母が、なぜ84歳で離婚を決意したのか。そして、その決断にＤＶ家族がどういう対応をしたのか。私の子どものころからの記憶を遡った若かりしころの母の思い出や、２０１３年から母の話に耳を傾けてきた私に母が語った事実を踏まえながら、私のＤＶ家族の肖像について語っていきたい。